

【短編・体験版】美術部長の家に遊びに行ったら乳首を弄られながら放置責めされました。

僕は今、クラスメートにして美術部長を務めている山口詩織の家にいる。

どうしてかという、今日のお昼頃に彼女からこんな頼みを受けたのだ。

「もし、あなたが暇なら今日の放課後私の家に来てくれないかしら。

男の子の体を描く練習をしたくてモデルになってほしいのだけど、あいにくうちの美術部は女子しかなくて...。」と。

特に予定もなく暇だったので、その頼みを引き受けて今こうして山口さんの家にいる、というわけである。

「身体をスケッチするから、着ている服を脱いでもらうことになるのだけど大丈夫かしら。もちろん下着もよ。」

「まあ、そのくらいはいいけど...」

引き受けたのは自分だし、絵の練習のためなら仕方ないだろう。

僕はそう言って、今着ている制服を脱いで綺麗に畳むのだった。

「協力助かるわ。改めて感謝するわね。

じゃあ、まずはこんなポーズを取れるかしら。あ、そうそう！いい感じよ。」

山口さんの指示に従い、希望の通りのポーズをとって絵のモデルの務めを果たす僕。

このまま、今回の依頼は順調に進む...はずだった。

「ちょっと取ってくる物があるから席を外させてね。そのままそこで待っててね」

「うん、了解〜。」

山口さんはそう言い、スケッチをしている居間からおそらく自分の部屋へと移っていく。

彼女が席を外して、3分ほどが経つ。

「ふう...結構疲れてきたなあ。あとどれくらい続くんだろう。」

僕はそうつぶやきながら、全裸の状態で横になっている。

——その時だった。

かちり。

「...ん？.....えっ！？」

突然、自分の手首、続いて足首にも拘束具がはめられるのを感じる。

さらに、首元に腕が巻き付いてきたかと思うと、口の中にタオルのようなものを詰め込まれてテープを貼られてしまうのだった。

「んぐっ！？んんっ！んんん！！」

「ふっふっふ...。

スケッチはこれで終わりだけど、せっかく私の家に来たんだしちょっと遊びに付き合いなさい？」

そう。僕を突然拘束してきたのは帰ってきた山口さんだったのだ。

「んん！んん！んんん！」

拘束された手足をばたつかせて抵抗する僕。

そこに、山口さんの平手打ちが僕のお尻に飛んできたのだ。

ばちーん！

「んんっ、ん——っ！」

突然お尻を叩かれたショックで、思わず飛び跳ねてしまう。

「ちょっとは大人しくなさい?? 抵抗したら帰してあげないわよ?」

嗜虐的な笑みを浮かべる山口さん。

その表情にすっかり恐れをなしてしまった僕は、すぐに従順になる。

彼女はそのまま、大人しくなった僕に着けられている拘束具の鎖の部分を縄で繋いでしまったのだった。

つまり、今の僕は全裸で逆さ海老縛りの形にされているわけだ。

山口さんは立ち上がり、哀れな姿になった僕を見下ろす。

そして、鞆の中から何やら新しい筆を取り出すのだった。

「久々にこれがやりたかったのよね...ふふふ。」

先ほど取り出した筆で、僕の乳首の中心を軽くつつく。

「んっっ...。」

一瞬、身体が跳ねる。

変に抵抗して本当に帰れなくされたら困るので、せめて変な声を晒さないようにと必死に耐えているのだ。

「今度はこの辺がいいかしら。そーれそれ...」

次に、脇腹や胸の周囲などをまんべんなく筆で撫でていく。

さわさわ...さわさわ...

「んっ...んんん...」

身をよじらせて快楽責めを少しでも逃れようとする僕。

だが、当然ながら気休めにもならない。

わざとなのか最初から興味がないのかまでは知らないが、彼女は下にある棒や後ろの穴は全く見向きもしていない。

それもあるって、もどかしい気持ちが一層高まってくる。

「...筆だけじゃ味気ないわね。

せっかくだし、今からあなたにいいものをあげるわね？」

山口さんはそう言うと、服のポケットから洗濯ばさみを取り出し、わざとらしく僕に見せつけてきたのだ。

「ん...？んんん！！？」

その洗濯ばさみを見て、僕は恐怖を感じる。

あれで今から何をするかなんて、言うまでもないだろう。

「んっ！んっ！んっ！」

それだけは勘弁してください、と首を振る僕。

だが、彼女はそんなの知らないとばかりに、僕の懇願を完全に無視して両方の乳首に洗濯ばさみを付けてしまう。

「んんんー！」

乳首が挟まれる痛みが襲ってくるのはもちろんだが、痛みが治まってきても洗濯ばさみはその存在感を出している。

常に触られているという感触が、僕の被虐心を刺激するのだ。

「今からちょっと買い物に行ってくるわね、すぐ帰ってくるから。

あなたはそのままそこで洗濯ばさみに可愛がってもらいなさい？」

「んっ！？」

予想外の展開に驚く僕。

山口さんはそう言うと、乳首に洗濯ばさみを付けられて拘束されたすごい姿の僕を残して家から出てしまったのだった。

僕はこの先どうになってしまうのだろう。

というより、ちゃんと帰してもらえるのだろうか？

不安と快楽責めの狭間に苦しみながら、僕はひたすら耐えるのだった。

【サンプルはここまでとなります。】